

北川千代の肖像 — 児童文学を軸として —

宮澤 健太郎

北川千代といえは一般には社会主義者、江口渙と結婚したことにより左翼作家と思われがちだが、児童文学作家としては果たしてどうであったのか、北川千代の視点だとかに注目して、真の狙いは何だったのかについて再検討してみたい。

北川千代とは

一八九四（明27）年六月十四日、千代は埼玉県大里郡大寄村（現、深谷市）に三人の兄のあとの長女として生まれた（下に妹二人、弟三人もいた）。父、俊は日本煉瓦会社の工場長であった。母は、てう。家庭的には恵まれたお嬢さま生活をしていた。本宅は東京西大久保にあり、ほとんど本宅にいたようだ。十一歳の時私立三輪田高等女学校に入学。「少女世界」「少女の友」などに投稿をし始め、学校は三年生で中退。一九〇五年（十五歳）には作品が雑誌に載るようになり、ペンネーム、大久保千代子、松平千代子、露おく籬、露子、露香等を使い分けていたようだ。十七歳で「少女世界」に『友情』が第三席入選掲載。十九歳の時、「少女世界」の編輯者、沼田笠峰を中心

に森田たま、細川武子、吉屋信子らと読書会「たかね」を結成。次の年、帝大のプロレタリア学生、江口渙と出会い、ひかれて、次の年（二十一歳）兄隆三の反対を押し切って、栃木烏山市の江口家に身一つで嫁す。一九一六年（大5）二十二歳で江口渙ともども東京・谷中清水町に出た。また渙から性病を移され、通院、二人ともいらだっていた。この頃、町名から清水町子のペンネームをもちいた。同じ頃岡本綺堂に師事したらしい。二十五歳（大8）の時鈴木三重吉の「赤い鳥」に関わり始めた。一九二〇年（二十六歳）には上野桜木に移転。その頃から左傾化。次の年に婦人社会主義団体赤瀾会入会、渙と離婚。すぐに同志の高野松太郎と結婚。三河島に移転。世の初次第にきな臭くなる中、三十歳代には、次々作品を発表。一九三五年（昭10、四十二歳）世田谷弦巻に引越し、『アングルトムの冒険』『コトバノイヘ』『アンデルセン童話』など出版。千葉・山武郡蓮沼に家を買う。四十九歳の時、夫松太郎死去。戦後も創作は多かったが昭和40年、七十一歳で10月14日死去。

作品の傾向

千代の作品の幅は広い。およそ同時期に活躍した女流作家には見られない児童ものにはめずらしい大胆な場面設定が見られる。しかし、やはり多いのは、愛をテーマにしたものであろう。家族愛、師弟愛を扱った作品群。教訓を軸にした作品群。それにファンタジーものも見られる。最も多いのは社会性を帯びた作品群。その中で最も注目に値するのは『春瀾』と『赤い海水着』であろう。早速分析してみよう。

① 社会性を帯びた作品群―その転換点

☆とくに異常な設定の3つの物語

『春瀾』（『令女界』昭4／4）と『赤い海水着』（『令女界』昭9／4）

それに『絹糸の草履』（単行本、講談社、昭6）

『春瀾』

十七の孤児の小娘ふじ、は叔母の家で下女をしていたがその家に入りする狡猾な男のためにだまされて妊娠する。ところがこの男はふじに粉薬を吞ませて墮胎をすすめる。墮胎に躊躇するふじは薬を飲みきれない。その結果生まれてきた赤子の顔には鼻がなかった。この子に、あぐりと言う名前をつけて育てるが、ある時浄光寺の灌頂会にあそびに行くと、そこでの見世物小屋で蟹娘の母娘の写真が飾ってあった。親の因果で不具に生まれたーという恐ろしいその言葉ゆえに病気になったふじはあぐりを絞め殺して自分ものを切った。

春瀾―はるたけなわにして自殺者多し―このような見出しで新聞に出たふじ、の記事は人人の目に止まらぬほどの小さな記事だった。

『赤い海水着』

孤児院にいた志摩が近藤さんの屋敷の子守り奉公に出たことは仲間からもひどく羨ましがられた。しかし子守りをはじめた志摩自身前よりもわびしさを感じていた。その家の十六になる娘、恵美子の我が儘し放題をみるにつけ、自分の不幸を思い知ったのである。お嬢さんを困らせてやる、というのが志摩の願望であった。ある日恵美子はお父さんにねだって、燃える様な真つ赤な水着をかってもらった。志摩はすきを見てその水着のはいった箱を盗み出

して水着を下水に投げ込んでしまう。それを見た一人の青年に捕まって近藤さん宅に連れ戻され、ことがあらわとなり、志摩はまた孤児院に連れ戻されたのだった。

以下の二作品はいずれもひどく読者を驚かせるだろう。妙齡の少女たちに読ませるにはあまりに驚くべき残酷な内容だ。『春瀾』のふじ、『赤い海水着』の志摩、いずれも孤児と言うハンデを負っている。ふじが、男に騙されての妊娠出産に加えて墮胎といったテーマはこれも重すぎる。最後に畳みかける様な見世物小屋の蟹娘の写真、それに子殺しと自殺。単に教訓ではすまない残酷さを擁している。しかし、社会の現実を見据えた作者の意図はそれらの裏を読ませようとしているのではなからうか。つまり少女たちに社会の残酷さを見据えさせ、覚醒させようとしているのではなからうか。また、『赤い海水着』の志摩のといった異常な行動も児童読者の理解を超えるものだが、ブルジョアへの絶えざる糾弾の姿勢を身につけた作者のやむにやまれぬ行動がそのままここに現れたと見たい。いずれも昭和前半のきな臭い反戦運動とファシズムの狭間の物語であることに注意が勸要だ。

『絹糸の草履』

吉屋信子の「花物語」のような出だしから始まる。私たちの好きな酒井さち子先生がお辞めになるので先生にお別れを言う為五人の生徒が先生の所を訪ねる。先生はおわかれに好きなものを何でもあげる、といってくれた。私たちはそろって先生の紙入れに入っている絹糸の小さな草履をおねがいます。しかしその草履には血と涙のわけがあつてあげられないというのであつた。その話とは。街道の馬車屋の山口庄作が十四になる娘のお文と貧しい暮らしをしていたが、この男が、ある時馬車に乗せた造酒屋の主人が馬車のなかに落とした大金の入った財布をぬす

んでしまう。後に急な暮らしむきの変化（派手な生活）に疑念を抱かれた庄作は捕まって牢屋に繋がれてしまう。3年の罪で牢屋にいるあいだに娘のお文は肺病のため死んでしまう。それとは知らない庄作はまじないの糸くずで創った小さな草履をつくって牢を出る準備をしていた。出所の時に刑務所長からお文の死という事実を聞かされその日がああ草履の完成した日だときいて庄作は泣き崩れる。そのまま所長の家に引き取られた庄作はまたその家でお文にそっくりな孤児の少女に出会った。ひたむきな庄作の愛の中でふたりは親子のようだった。その娘が東京の女学校に行く日に理由を話してこの絹糸の草履をもたせたのだ。庄作は別れて3日目に肺炎で死んだ。これこそ庄作の形見の品だったのだ。そして先生はまさにその娘で、今度結婚するという。

この作品の小道具は少女たちの喜びそうな小物Ⅱ絹糸の草履Ⅱであって、お文の死や庄作の死を通して、不幸な父の願いがこもった絹糸の草履の意味が増大したと思われる。

☆いかにも「赤い鳥」的に書かれた『世界同盟』（「赤い鳥」大8/3）と「女学生」（大12）に書かれた『夏休み日記』

『世界同盟』は、鈴木三重吉が「赤い鳥」を発刊させたのが大正8年7月だから、まだ草創期の「赤い鳥」に推挙されて掲載された作品だが、やはり江口が漱石の門下生ということで三重吉、江口渙↓千代への依頼、というのが作品発表の流れではないかと日本児童文学大系（ほるぷ）の解説で浜野卓也は書いている。ここでも述べられているが、三重吉の社会観の限界は千代のこの『世界同盟』に見られる子ども達の仲良し倶楽部的なところがせいぜい

だろう。

それまでの女学生向けの作品は花物語のお嬢様ものか貧しい家庭の少女ものが主であったが、『夏休み日記』は前者に近い内容がこめられている。ただ作品の中に所々社会の不公平に対するコメントが散見されるのも確かだ。金持ちが別荘にゆけて貧しい者が暑い家に居るといふ私の問い掛けに叔父さんは「今の世の中みんなそんな風に間違つてゐるのだ」などと答えているし、最後の部分では「私は貧乏の為に卑屈になつた人を見ると悲しくなる。その人をそんなにした世の中が悲しくなる。」といつてるところから千代が社会主義に目覚めかけたのが大正12年ごろだということが推測される。

☆「幸福」(『少女画報』大14/4)と『兵隊』(『若草』大15/3、宝文館)それに『蜜柑』(『若草』昭3/1)

とは私小説風な構造を持ちながら愛を描く

北川千代が江口渙から高野松太郎に愛を移したのは大正11年頃とされるが『幸福』や『兵隊』の内容はその情況を視点を變えて書いてあるので児童に読ませるには多少難解である。前者では小叔母として出て来る爛子(＝千代自身)が離婚してなければ幸せだったのにいまは貧しい生活をしていると思いきや、姪っ子の菁子が今爛子が住んでいる所を訪ねると意外や二人が楽しそうに幸福そうであった。後者2作品ではその具体的な二人の生活が描かれ、愛の絆がよくでてゐるが、やはり児童向けとしては難解であろう。

昭和に入ると社会における貧しさ、貧乏が大きくテーマにされる作品が多くなる。『お父さんの仕事』(『文藝』昭10/1)などはお父さんが日雇いといった仕事にも子どもらしい喜びを見せている。

② 家族愛を中心とした作品群

父母を中心にした家族愛の物語は1つの千代作品の基調低音となっている。

とくに大正14年の作品『お母さんを売る店』（週刊朝日）は突飛でしかもユニークな作品である。

父母のいない郁三が町で〈お母さん屋〉の広告をみつける。お母さんを欲しい人にお母さんを売りますというのだ。人形として理想の母親を売っているのだ。帰ってお祖母さんに相談するとお祖母さんは葛籠を捜し、あつたお金45円28銭を持たせてこれで買えるお母さんを買っておいでと送り出された。もちろんお母さん屋で事情を説明してやっと買ったお母さんは奇麗ではなかったけれど、親切でやさしくてよく働くお母さんだった。友達たちも値段のたかいお母さんを買った子どももいた。しかしこわれたお母さんの手を直してもらおうと、お母さん屋にゆくとあの店は影も形もありません。郁三は呟きます「奇麗で、ただ遊ぶ時だけ可愛がつてくれるお母さんなんぞ、僕要らないや。」

この母を買う、というアイデアは斬新で読者の関心を引いたことであろう。

そのほか昭和22年9月「鳩」（小沢出版）の『お母さんの外出』、昭和4年9月「小鳥の家」の『夕焼け雲』は母子の愛情が、昭和10年12月の「幼年倶楽部」の『山上の旗』や『雪の日』（少女の友）、昭5／10）などは逆に父と子の愛情の物語だ。

③ 教訓・教育を扱った作品『茂次の登校』（山野に鍛へる少国民」、昭17／4）

学校嫌いな茂次は学校をさぼって釣りばかりしている。しかしそんな茂次を思っただけで家にまでおしかけてくれる山

村先生。しかし先生も兵隊に取られて戦地にいつてしまうと茂次はもとのように不登校になってしまった。しかし代わりにきた小宮先生は町の光明寺に下宿して兔を飼っていたことが茂次の関心を引いたのだった。この兔が縁で茂次は兔の世話係としてしだいに学校にゆくようになった。そして勉強もしだいにするようになる。

その他、教訓的な作品としては『薤』（『令女界』昭2、宝文館）がある。子守りをしている姉の万喜、そしてその弟正太、この二人は子守りをしている間に、はたけの隅の彼岸花の球根をらつきようと間違えてたくさん掘ってもってかえると母親にそれはたべられない歯つけかけ花（＝彼岸花）の根だとしてきかされる。

『森の小母さん』（『童話文学』昭5／8）では親切な櫛の木のお母さんが親切にも飛んで来た宿り木に宿を貸したばかりにじぶんが減びてしまうとの教訓を語る。

おわり

北川千代の視点は他の女流作家の作品とは以上の様に異質であることがわかる。不遇な少女の妊娠、出産それに奇形児の問題、さらに見えない糸で結ばれる不条理な愛と死の問題。それに私小説風な難解な愛の問題。家族愛の欠如の補填などがテーマとなる。教訓的な面も社会主義的な正義感を通して書き込まれている。児童にとつてこれらのテーマが適当であるかどうかは読んだ読者（児童）が決めれば良い、というのが千代の判断であったようである。